

「保護者と離れて学ぶ生徒たちと共に」



立教英国学院
校長 棟近 稔 先生

立教英国学院は、イギリスにて 1972 年に設立された私立在外教育施設です。小学校から立教で過ごされ 50 年、立教大学を卒業後すぐに渡英し、立教英国学院に赴任されて 35 年という、生粋の立教人である棟近稔校長先生にお話をお伺いしてきました。

— 在外教育施設である立教英国学院の特徴についてご説明ください。

- ◆ 朝 7 時の起床から就寝まで、生徒、教員も一日三食をほぼ共に過ごし、大きな一つの家族として生活しています。学校の敷地内に寮があり、生徒全員が寮生でそれぞれが助け合って暮らしています。「先輩、後輩分け隔てなくみんな仲がいい」というのが一番の特徴です。

— 在籍する生徒たちのご両親はどのような国にお住まいでしょうか。

- ◆ 一番多いのがイギリスで 31 名、次がフランスで 10 名、ドイツが 5 名、それからスイスやオランダ、遠いところではロシアや中国、チェコ、南米の方もいらっしゃいます。本校は基本的には保護者が海外在住の生徒を優先していますが、昨年から定員に余裕のある時には、保護者が日本在住の生徒の受け入れも始めましたので、現在は日本から直接来られる方も全体の 3 分の 1 いらっしゃいます。

— 何年生の生徒が在籍していますか。

- ◆ 小学校 6 年生から高校 3 年生までが在籍しています。低学年は少ないですが、日本人学校等の中学校を卒業後に、高校へ入学してくる生徒がいます。また、高校 2 年生を過ぎると日本で受入先を探すのが困難になることから、保護者が帰国になっても子どもだけこちらへ入れて帰国するという家庭も増えます。そのため、高校生は各学年 30 名くらいの数になっています。

— 「海外で日本の教育をする」ということの難しさはどのようなことでしょうか？

- ◆ 今はインターネットで簡単に情報を入手できる時代ですから、以前に比べると困ることは少なくなりました。むしろ海外にいると「変な雑音を入れずにきちんとした教育ができる」というよい面があります。日本にいるといろいろな情報が氾濫していて本質を見失うこともあるのではないかと思います。海外にいる子ども達は、素直でひねくれたところがないですね。例えば子ども達に「日本の子ども達はもっと勉強しているぞ」と言うと一生懸命勉強したりして純粋に勉強に向き合うことができていると思います。

— 寮生活はどのように行われているのでしょうか。

- ◆ 非常に規則正しい毎日で、7 時起床を必ず守るようにしています。それを守ることで、夜きちんと寝るようになるのです。就寝時間は学年によって違いますが、高校 3 年生でも 12 時には寝かせるようにしています。かつて高 3 で就寝を夜中の 1 時にしてみたことがあるのですが、そうすると昼間持たないんですね。授業中に寝てしまったり、夕方寮に戻って完全に熟睡してしまったりする子が出てきて、その上今度は夜に目が冴えてしまい逆に夜 2 時 3 時まで起きるようになって授業に身が入らない、というような経験がありました。今は 12 時には絶対に寝て朝 7 時には起きることを徹底して、1 日の生活リズムを作っています。放課後はクラブ活動や楽器の練習等をして過ごし、夕食後は自習時間になっています。上級生になると、イギリスのサイエンスの授業やイギリス人による英会話の授業などが増えるので、夜にも授業が行われます。土曜日も午前中は授業があり、日曜日の午前中は全校清掃をしています。

— 先生方も寮で生徒と一緒に生活されているのでしょうか。

- ◆ 独身の教員は構内に居住していて、家族のいる教員は近くの村に家を借りて住んでいます。日直の教員は朝7時前に学校に来て、夜は早く帰る教員でも10時までは残っていますし、上級生の担任は夜12時まで残って生徒の自習のアドバイスをしています。私も朝7時に外に立って、起きてきた子たちに「おはよう」と声をかけ、食事も三食一緒にして、夜も11時就寝の子までは、みるようにしています。そして子どもたちが寮に帰るときに、外に立って「おやすみ」、と言ってから家に帰っています。

夜は教員が交替で寮に泊まっています。当直は決まった人に任せきりにするのではなくて教員全員が順番に寮の面倒もみることで、生徒一人ひとりの生活の様子を全員で把握していくようにしています。

— 親と離れて暮らす子ども達の心的ケア、特に低学年の子どもについてはどのようにされていますか。

- ◆ 一番気を付けているのは「子どもを教員がよく観察する」ということです。教員は食事子ども達と一緒に摂るのですが、そこでいろいろなことがわかるんですね。子どもに変わった様子が見られたらすぐに声をかけたり、担任に報告して担任から聞いてもらったりしています。また上級生が下級生の面倒をよくみてくれます。「身近なところに信頼できる人がいる」ということが大切だと思います。低学年の担任は生徒に密着していて、生徒が寝るまでずっとそばにいますので、「低学年だと寝るまで気が抜けない」、というところもありますけれどね。

— 学校から保護者への連絡、子どもから保護者への連絡はどのようにされているのでしょうか。

- ◆ 学校から保護者への連絡は電話もありますが、今はほとんどがメールです。また学校のホームページを頻繁に、多い時には1日に2度更新していて、学校の様子を詳しくお伝えするようにしています。保護者の方もホームページの更新を楽しみにしていらっしゃるようです。

また保護者が学校に文化祭やその他の学校行事で来られた時や、出張などでこちらに来られた時にはいつでも担任と面談の機会が持てます。高校3年生にもなると、わざわざ日本から面談のために来られる保護者の方もいらっしゃいます。子ども達はいつでも自由時間にパソコンが使えるので、特に女の子は頻繁に両親とメールのやり取りをしているようです。

— 保護者の方が、子どもの寮生活に関して、一番心配されるのはどのようなことでしょうか。またその対処としてご説明されるのはどのようなことでしょうか。

- ◆ 一番ご心配されることは健康面ですね。例えば昨年新型インフルエンザが流行った時にはずいぶん問い合わせがありました。幸いにも校内での感染はありませんでした。学校には日本で看護師をしていた日本人の養護教諭がいますし、イギリス人の元看護師さんにも来てもらっています。そして近所のドクターに校医をお願いしていて、何かあればすぐに病院に連れていく体制を取っています。保護者の方には「健康面のフォローはこのように整っているのご心配ないですよ」ときちんと説明をさせてもらっています。高校3年生になるとやはり進学についての相談が多くなってきますが、進学については「まずは生徒が親と話さないといけないよ」ということで、親と子が頻繁にメールや電話でやりとりをして、先にじっくり親と話をさせるようにしています。

— 保護者の方たちは「イギリスにある学校に行かせる」ことでどのようなことを期待されていますか。

- ◆ やはり「英語力と国際感覚を身につける」ということですね。そのためには「イギリス人との交流を図る」ことを心がけています。今年は現地の学校から7人が交換留学生としてやって来て、1週間寮に泊まりました。また、英会話の授業では、中学校1年生のまだ英語を習いたての子どもたちを近くの町に連れて行って、質問だけを教えて何人にインタビューできるか、ということを経験させました。この辺はイギリスの中でも非常に豊かな地帯で治安もいいですし、住んでいる方たちも裕福な方が多いので、生活にゆとりがあります。そういう方たちなので、余裕を持ってやさしく接してくれますね。

- 学校生活・寮生活を含めて、長時間を生徒たちと共有する中で先生方が心がけていられることはどのようなことでしょうか。
- ◆ とにかく「常に子どもと接する」ことが大切だと思います。生徒は、時には寂しい思いをしていることもあるかと思います。ですから「常に見守っているよ」という安心感を持たせることが大事ですね。長時間子ども達と過ごしていると教員の拘束時間が長くなって大変なのですが、それだけやりがいがあるので、教員はみんな一生懸命やっています。信頼関係ができてくると思いがけない相談を受けたりします。そうすると教員としてもうれしいところですね。
- 離れて生活している保護者にお願いしたいこと、また子どもに対してフォローしてほしいことはなんですか。
- ◆ まずは「保護者と担任との信頼関係を築く」ことですね。全幅の信頼をもってお任せいただきたいということです。あとは、お子さんがご家庭に戻ったときのフォローですね。例えば日本語が苦手だったり漢字が書けなかったりする子どもに学校で毎日漢字を練習させていても、夏休みに親元に帰るとすっかり忘れてしまう、ということがあります。そういう点はご家庭でも声をかけて継続して勉強させていただきたいと思います。また生徒は普段親と離れているので、「甘えたい」という気持ちがあると思います。ですから休みで親元に帰ったときにはしっかりと甘えさせてやって欲しいですね。
- では最後に国をまたいで家族がやむを得ず離れて暮らしている方々にアドバイスをお願いいたします。
- ◆ 父の日や母の日にメールを出したり、電話をしたり、ということが大勢の子ども達が行っていますが、機会あるごとにお互いに連絡を取り合うことがなにより重要ではないかと思います。連絡があると、「自分のことを気にかけてくれているんだな」ということが伝わります。とにかく頻繁に連絡を取る。そして休みに自宅に帰った時には家族そろっておいしいものでも食べに行く、等の機会を作って、たまに会った時の楽しい時間をイベント化してしまうといいのではないかと思います。これまで、「離れていることで逆に家族のきずなが強まる」という例もたくさん見てきましたから。

インタビューを終えて

自然に囲まれた広大な敷地の中にある整った施設、そして歴史を感じさせる寮に度肝を抜かされました。生き生きとした生徒たちの表情を目にして、「ここでの生活は生徒たちにとって生涯忘れえぬものになるのだろうな」と思いました。優しく生徒たちを包み込むような、柔らかな口調の棟近校長先生に皆さんがよせる信頼は厚いことでしょう。これからも生徒たちの親となり子どもたちを支えてあげてください。

英国立教学院



かけはしより

ロンドンの南、車で1時間30分程度のところに学校はあります。四季折々の花の咲き乱れる丘や草原をもつこの学校は、今年で創立40年となり、ロンドン日本人学校より古いそうです。土曜日にお伺いしたので、大きな食堂で生徒・教員が揃ってのランチに参加させていただきました。取り分けられた料理をみんなで回し、祈りを捧げていただきました。同じテーブルに座った生徒さん何人かとお話をさせていただきましたが、とっても明るく楽しげに学校生活、寮生活、買い物などについて話してくれました。卒業生の登山家の野口健さんは、悩んだときに母校を訪ねて、心を落ち着けたこともあったそうです。卒業生にとって、この学校での日々は「心のふるさと」なのでしょう。(写真は女子寮と寮のラウンジです)